

## 人は人、自分は自分

大原悦子 29 回生

わたしは大学卒業後、20年近く新聞記者をしていました。「書く」ことが好きで、好奇心旺盛だったので、記者になるのは子どものころからの夢でした。

念願かない、全国紙の記者になったわたしは、奈良県の支局に配属されました。いまでも昔も、新人記者は地方支局からスタートします。支局員10数名のなかに女性はわたしだけ。当時は「男は外で仕事、女は家庭を守る」という考えが社会に根強くありました。新聞社も圧倒的な男社会で、支局に女子トイレもないのです。そうした環境で、わたしは「男性に負けたくない。記者として認められたい！」と力んでいました。しかし、男、女に関係なく、そもそもわたしはダメな記者だったのです。

書くことは得意でしたが、それは作文や感想文の話。記者は現場に行き、見知らぬ人たちから話を聞き出し、締め切りをにらみながら素早く記事にまとめなければなりません。事件や事故が起きると、自分で車を運転して現場に駆けつけるのですが、わたしはいつも他社から大きく遅れをとっていました。道に迷ったり、タイヤが溝にはまったりしていたからです。なんとか到着しても、火事や事件現場の大混乱のなかで、だれに、何を聞いたらいいのか、あたふたするばかりでした。

支局2年目は、高校野球の担当に。スコアブックをつけ、試合の戦評を書かなくてはなりません。焦るとスコアブックの「1」が投手なのか1塁手なのかわからなくなり、めちゃくちゃな評を書いたこともありました。

そんなわけで、最初の2、3年は大げさではなく、毎日怒鳴られていたのです。しかも、途中から、とても優秀な同期が転勤してきました。その人と比べると、自分のダメダメぶりが際立ち、「わたしは向いていない。辞めたい。辞めよう！」と思う日々。いま風に言うと完全に心が折れていました。

なんとか続けることができたのは、「つらいのは最初の3日、3カ月、3年だよ」と先輩に言われていた

ことと、奈良で愚痴を聞いてくれたり、慰めてくれたりする友人ができていたからです。また、新宿高校の国語の先生（残念ながら昨年、亡くなられました）とは卒業後もずっと年賀状などをやりとりしており、その先生がいつも「書き続けなさい」と励ましてくださっていました。

3年が過ぎ、わたしは大阪本社に転勤となり、暮らしや教育、さまざまな差別の問題などを扱える部署に配属されました。お年寄りや、職場での差別と闘う女性、心身に障害を抱えた人たち、登校拒否で家に引きこもっている中学生……そうした方たちのお話をじっくり聞き、社会のなかで見落とされがちな視点や問題などを記事にすることができました。

「書いてくれて、ありがとう」と言われることも増え、こんな自分でもささやかながら何かの役にたっているのかも、と思えるようになりました。

スピードや、記事の鋭さなどではほかの記者にかなわない。けれど、鋭くないわたしだからこそ、安心して心を開いてくれる人たちもいたわけですから。人と比べてできないことに劣等感を抱くのではなく、「自分にできること」に目を向けたら、ふっと気持ちが楽になり、少しずつ自分らしい仕事ができるようになった気がします。それには、あの苦しい3年間も必要だったのです。怒鳴られることが良かった、とは決して思いませんが、記者としての基礎体力をつける期間がなければ、自分らしさも見えてこなかったと思います。

いまは記者をやめ、大学で学生さんに文章の書き方を指導したり、お年寄りに「自分史」の書き方をアドバイスしたりしています。「自分にできること」を探ってきたら、結果的に自分が好きな「書く」仕事をずっと続けてきたことになりました。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）